

政治思想研究論文の「型」について

『政治思想研究』編集委員会

はじめに

『政治思想研究』には、毎年、多くの力作が投稿されており、編集委員会委員一同、心強く感じています。論文を投稿して下さった会員の皆さん、匿名の査読を引き受けていただいた査読者の皆さんに、お礼申し上げます。しかし他方、投稿論文ならびに査読コメントを網羅的に見る中で、必ずしも論文の「型」に関する考え方が共有されていないのではないかと感じられることがあり、それが掲載可否の判断に影響を与えている面があることに少なからぬ懸念を抱いております。たとえば、「先行研究との相違を明示するように」といった類の初歩的な査読コメントが付くケースが少なくありません。より深刻なのは、先行研究批判がなされていない、あるいは不十分にしかなされていないせいで、剽窃という疑念が生じるケースも少なからず発生し続けていることです。ここに、論文の「型」に関する理解の度合いが掲載可否に影響を与えかねないと思われるポイントを『政治思想研究』編集委員会としてまとめましたので、論文投稿の際に参考にいただければ幸いです。

1. なぜ論文を公表するのか

『政治思想研究』で論文を公表する第一義的な趣旨は、研究成果を会員全体で共有し、そのことによって日本における政治思想研究の水準、会員が政治学、政治理論、政治思想史などを大学で教える際の、教育の水準を向上させていくことです（このことは、学会発表にも当てはまります）。そのため、『政治思想研究』に投稿する際、この研究成果を政治思想学会会員にぜひとも共有

してほしいと心から願っているかどうかを考えてみてください。論文を投稿すれば、査読者や編集委員会に少なからぬ労力を強いることになります。また、論文が活字になれば、特に専門の近い研究者に、その論文を読む道徳的義務を負わせることになります（この点は、後述する先行研究批判という論点と関わります）。自分の投稿論文が会員と共有するに値するかどうかを考えて論文を執筆し、投稿するようにしてください。

『政治思想研究』の査読は、想定読者が政治思想学会会員であることを念頭において為されていますが、会員の専門分野は、政治哲学・政治理論、西洋政治思想史、日本政治思想史に分類されておりますので、該当する分野の会員を念頭において執筆されていれば、査読において問題視されることはありません。それ以外の分野の会員にも理解できるよう、読みやすさに配慮された論文になっているかどうかは、掲載可否を超えたところで問われる、論文の質に関わる問題ということになります。

2. なぜ先行研究批判をしなければならないのか

次に査読において問われるのは、先行研究批判が十分になされているかどうかという点です。残念ながら、投稿論文のなかには先行研究批判が欠落しているもの、あるいは不十分であることが主因となって掲載不可となるものが少なくありません。

研究論文を執筆する際には、過去の研究書や研究論文は、第一義的には、単なる参考文献ではなく、乗り越えるべき到達点です。ある研究テーマに関して、内外でどのような研究が蓄積されてきたのか（自分自身が過去に発表した研究書や研究

論文も含まれます)。その最高到達点をもってしても、どのような限界をはらんでいるのか。自分の論文はどのようにその限界を克服しようとするのか。自分の論文の論旨（アーギュメント）のオリジナリティーを証明するために、その論旨との関連で過去の研究書・研究論文（特に最高到達点の）を整理・批判するのが、先行研究批判です。関連する研究書や研究論文を紹介しただけでは、先行研究批判にはなりません。先行研究を紹介しただけでは不十分であり、自分の論文の論旨との関連で先行研究の意義と限界を明らかにし得ているかどうかという点が、査読において問われている重要なポイントです。先行研究との違いを明示してこそ、査読者も、論文の論旨にオリジナリティーがあるかどうかを判断しやすくなります。論旨にオリジナリティーがあることを断定するのが難しい場合であっても、投稿者がオリジナリティーを主張していることは理解できますし、査読者だけでなく、別の研究テーマを研究している会員にとっても、論文のオリジナリティー（と主張されているもの）をつかみやすくなります。それ以上に重要なことですが、先行研究との違いを明示してこそ、アイデア盗用というクレームが生じるのを避けることができます。先行研究批判は、序論（はじめに）の本文もしくは序論の注に行うのが普通です。なお、結論（おわりに）においても、本論で論じてきたことを踏まえて、先行研究との相違点を改めて整理すれば、なお望ましいでしょう。

先行研究批判に関して、二つの点を補足しておきます。第一に、先行研究批判が自己目的化してしまうと、重箱の隅をつついたような論旨になるおそれがあります。レヴェアトな論旨があつてこそその先行研究批判です。先行研究批判のための先行研究批判にならないようご注意ください。第二に、自分の研究対象に先行研究がないか、あるいは極めて少ない、ということがありえないわけではありません。そうした場合には、その対象を扱うことが知的にどのような意義があるかを説明することが必要です。これまでの研究がそれに着目してこなかったのは、そこに取り上げるべき知

的な意義を見出さなかったからかもしれないからです。

3. 注の付け方

注の付け方についても、改めて認識を共有する必要があります。若手による投稿論文のなかには、なぜ注を付けるか、どのように注を付けるかについて十分には理解されていないように見受けられるものも少なくないからです。

注の中には本文に組み込むには細かすぎたり、本文に組み込むと論証の趣旨から議論が脱線したりするが論文に記しておいたほうがよい事柄を本文の外に出す補足の注もありますが、より重要で省略することができないのは出典の注です。出典の注を付けずに直接引用や要約引用（パラフレーズ）をすると、研究不正や著作権侵害になり得ます。この点は、研究倫理講習などで共有されていると思います。出典の注を付けるのは、著者が何を根拠にそのようなことを記しているのか、査読者や読者がチェックできるようにするためです。特に、同じテーマで研究する研究者にとっては、根拠となる文献に当たってチェックしたいと思う者もいるはずです。しかるに、出典の注が付いていなければ、明確な根拠に基づいて書いているのか、それともいい加減な根拠（それどころか捏造）に基づいて書いているのか、確認することが極めて難しくなります。それゆえ、単に文献名を挙げるだけでなく、可能なかぎりページ数を限定することが大事になってきます。

やや細かい点になりますが、注を付ける際、次の点にも神経を使ってほしいところです。たとえば、A、B、Cという三つの文章の最後に注を付け、「A。B。C（注）。」のように表記します。この場合、注がCに係ることは明らかですが、AやBにも係るかどうかは曖昧です。処理の仕方は難しいですが、Aの前にXを入れれば、注がAやBにも係ることが明確になります。たとえば、「Xによれば、A。B。Cというのである（注）。」のように表記すれば、注がAやBにも係ることが明確になります。他の手法もあると思い

ますが、いずれにしても、このあたりまで細心の注意を払ったうえで注を付けていただければと思います。

4. 校正について

校正については、出版社の編集者、編集主任・副主任も校正作業を担当していますが、最終的な責任は著者自身が負うことになります。間違っているという前提で、投稿前だけでなく校正段階でも徹底的にチェックしてください。自分だけでは気づきにくいことも少なくないので、身近な研究者にチェックをお願いするとよいでしょう。

たとえば、45 頁を 54 頁にしまったり、あるいは、岩波新書を岩波文庫にしまったり——こうしたケアレスミスは想像以上に多くあります。例えば原文を 400 字程度引用すれば、一、二カ所は誤植があるに違いないと思ってチェックしてみてください。過信は禁物です。特に留意してほしいのは、校正刷りだけを見てチェックするのは校正とはいえないということです。それでは、誤植を見つけることはできても、正確に原典を引用できているか、ページ数にミスがないかといった点はチェックできないからです。これらの点を見つけ出すためには、必ず校正刷りと現物とを照らしあわせてチェックする必要があります。

最後に

以上、『政治思想研究』編集委員会から会員の皆さんに、論文投稿上の留意点を記してきました。最低限の「型」を踏まえていないばかりに、掲載不可となる論文があることは残念なことです。最低限の「型」を踏まえた論文の投稿をお待ちしています。「型」の要求は、投稿者の思想的立場やスタイルを縛るものではありません。むしろ「型」の共有があればこそ、一人ひとりの自由を尊重することも可能になります。その点をご理解いただき、『政治思想研究』に論文を投稿していただけることを編集委員会一同期待しています。

J-Stage 登録情報確認のお願い

ホームページ管理委員会

『政治思想研究』第 9 号から第 24 号に掲載された論文・書評を J-Stage に登録しました。ご自身の論文・書評の登録情報に誤りがないか、ご確認ください。なお、J-Stage の仕様上、「第〇号」ではなく「第〇巻」として表示されておりますが、この点は修正できません。万が一、登録情報に誤りがございましたら、ホームページ管理委員会の岡崎晴輝までご連絡ください。

okazaki.seiki.882@m.kyushu-u.ac.jp